基礎看護学実習におけるライフヒストリーインタビューによる生活者理解

Understanding Patients as Individuals with Their Own Lifestyles through Life History Interviews in Basic Nursing Practicum

佐々木満智子、家入裕子、藤本美由紀、丹　佳子
Michiko Sasaki, Yuko Ieiri, Miyuki Fujimoto, Yoshiko Tan

要旨
本研究は、生活者理解を目的として導入したライフヒストリーインタビューを初学者に用いることの効果、すなわち基礎看護学実習Ⅰの目的の一つである「対象を生活者として理解」するという目標が達成できているかどうかを明らかにすることを目的に、令和5年度基礎看護学実習Ⅰ受講生57名が教育の一環として作成したレポート内容を研究のために二次利用し、学生が理解した「生活者」を質的帰納的に分析した。その結果、【自宅での日常生活を送る人】、【楽しみを追究する】、【前向きな思いがある】、【その人らしさがある】、【病気や老いに向き合う】、【家族との関係】、【地域の人との関係がある】、【役割を持つ人】、【否定的な感情がある】、【自立して生活したい】、【困難感を感じる】、【今後のことを考える】の12カテゴリが抽出された。これらの内容および視点は先行研究で示されており、本研究の結果とも一致していたことから、学生は対象を生活者として理解することができていた。

キーワード
基礎看護学実習、ライフヒストリーインタビュー、生活者理解

keyword
Basic Nursing Practicum、Life History Interview、Understanding patients as individuals with their own lifestyles

1．序論

学生は看護の対象者を「生活者」として理解することが重要である[1)]。2022年の指定規則改正では、療養の場の多様化と疾病や健康の概念の変化から、「看護職員には対象を生活者として捉え、看護サービスを提供するという役割が一層求められている」[1)]と、在宅看護論だけでなく、あらゆる看護の場で「生活者として捉える」必要性が述べられている。生活者とは、吾郷ら[2)]によると「その人を取り巻く家族,地域社会との関わりや役割をもち,その中で個人の生活習慣や信条をもちながら生活行動をしている人」と定義されている。さらに、患者を単に病気をもつ人(体)としての理解にとどまらず、現在を生きる対象の生活状況を捉える水平的な視点と同時に、過去や経験をもち、生き方を主体的に選択しながら健康を実現していこうとする存在と捉える必要があり、看護の対象として歴史をもつ人と捉える見方を育てる必要があると述べている。

この「生活者としての理解」を促すために、本学では令和4年度の新カリキュラムから、基礎看護学実習Ⅰにおいて、受け持ち患者を対象とした学生によるライフヒストリーインタビューを導入した。ライフヒストリーとは「個人が歩んできた自分の人生についての個人の語るストーリー」[3)]である。ライフヒストリーを聴取することで学生は、患者のこれまでの人生や歴史に目を向けることで、患者を単に病気をもつ人(体)としての理解にとどまらず、過去や経験をもち、生き方を主体的に選択しながら健康を実現していこうとする存在[2)]として、すなわち患者を「生活者」として捉えられるのではないかと期待して導入した。

先行研究によると、ライフヒストリーインタビューは、対象者理解のための学習手法の一つとして、これまでも多く用いられてきた。小泉ら[4)]は老年看護学の対象理解にライフヒストリーインタビューを取り入れた結果、学生は、高齢者を以前のイメージよりも活動的で肯定的にとらえるようになり、ライフヒストリーインタビューは、高齢者の現在の生活状態と生活史を学ぶ機会を提供し、高齢者の持つ特質を理解する助けとなることを明らかにしている。また、尾﨑ら[3)]は老年看護学原論で取り組んだライフヒストリーインタビューのレポートの考察を分析した結果、「高齢者の理解と敬うべき対象としての実感」、「高齢者の人生と経験の意味を理解することの重要性」等、対象理解が深まったことを報告している。

しかし、ライフヒストリーインタビューを用いて生活者として対象を理解する取り組みは、前述のように老年看護学実習や在宅看護学実習での報告が多く[5)]、基礎看護学実習を受講する１年生すなわち初学者への効果は未知数である。

そこで、本研究では１年生が基礎看護学実習Ⅰで作成したレポートの内容を二次利用し、生活者理解を目的として導入したライフヒストリーインタビューを初学者に用いることの効果、すなわち基礎看護学実習Ⅰの目的の一つである「対象を生活者として理解」するという目標が達成できているかどうかを明らかにする。

2．方法

1）研究対象とデータ収集方法

ライフヒストリーインタビューを初学者に用いることの効果、すなわち基礎看護学実習Ⅰの目的の一つである「対象を生活者として理解」するという目標が達成できているかどうかを明らかにするために、令和5年度基礎看護学実習Ⅰ受講生57名が教育の一環として作成したレポート内容（ライフヒストリーインタビューを通じた学び）を研究のために二次利用した。

(1) 基礎看護学実習Ⅰ

本学の基礎看護学実習Ⅰは、看護栄養学部看護学科１年生後期11～12月、毎週金曜日に開講される１単位の必修科目である。「対象を生活者として理解するとともに、療養の場の多様化をふまえ、さまざまな保健医療の場と看護活動の実際に触れ、広く看護の役割を考え、対象に向き合う看護者としてのコミュニケーションのあり方を学ぶ」という目的の下、5日間の実習（①保健医療福祉施設見学、②病院各部門説明、③病棟実習、④外来同行実習、⑤交換学習会）を行っている。目標は表１のとおりである。本研究で用いるライフヒストリーインタビューは「対象を生活者として理解」することをめざし、③病棟実習において、学生が受け持ち患者１名に対して行っているものである。

表１　基礎看護学実習Ⅰの目標

（1）地域社会でおこなわれている看護活動の見学を通し、保健医療福祉活動に関心を持つとともに、医療従事者の役割・看護職の役割を考える。
①保健医療福祉施設を利用する人々が保健医療福祉に　対して期待している事柄について理解する。
②保健医療福祉施設における医療従事者の多岐にわたる職種と役割を理解する。
③さまざまな場で活動する看護職の役割・機能の実際を理解する。

（2）病院の機能や役割を考える。
①病院における施設・設備、各システムの現状を知り、各職種の役割の重要性を理解する。
②病院機能の中で看護職が果たしている役割を理解し、各職種との連携のあり方を理解する。

（3）地域で暮らす人・患者・家族のニーズに関心を持ち、看護の役割を考える。
①地域で暮らす人の生活の様子や健康観に関心を持ち、看護の対象を生活者として理解する。
②外来を訪れる患者の受診に同行して、患者・家族のニーズに関心を持ち、患者・家族が病気を持ちながら暮らす生活者として理解する。
③外来を訪れる患者の受診に同行して、医療チームメンバーの役割を知り、看護職が果たす役割と連携の重要性を理解する。

（4）看護の対象に接する際の、コミュニケーションについて学ぶ。
①対象に対して積極的な関心を持ち、対象の気持ちや人間としての尊厳を大切にして対象と接する。
②対象との相互作用を通して自己の感情や考えに気づくとともに、自己の言動が対象にあたえる影響を考える。

（5）看護に対する興味や関心を持ち、探求心をもって課題にのぞむ。
①観察する力と思考する能力を養い、現状の中に潜む問題に疑問や課題意識を持つ。
②疑問や課題に対しては、文献を活用したり、カンファレンスで検討するなど、積極的な探求活動を行う。
③今後の学習課題を見い出す。

(2) レポート課題「ライフヒストリーインタビューを通じた学び」

病棟実習において回復期の患者１名を受け持ち、その患者に対して行った、生まれてから現在に至るまでのライフヒストリーインタビューを通じて、生活者として理解することについて考察した。

レポートは「1.目的」「2.受け持ち患者のライフヒストリー」「3.考察」「4.結論」「5.文献リスト」で構成するよう事前に指示した。「1.目的」は「受け持ち患者が生まれてから現在に至るまでのライフヒストリーインタビューを通じて、生活者として理解することについて考察する」である。「2.受け持ち患者のライフヒストリー」は時系列に整理し、Ａ４サイズの大きさの図（絵）で表現させた。「3.考察」はライフヒストリーインタビューおよび聴取したライフヒストリー（事実）をふまえて、①ライフヒストリー聴取により、あなたは対象理解がどのように深まりました(変化した）か。②あなたは患者さんを「生活者」として、どのように理解しましたか、の２点について記述させた。

レポート課題の説明は、実習オリエンテーションで行った。その際に、生活者およびライフヒストリーインタビューについての説明も行った。

２）分析方法

ライフヒストリーインタビューレポートの記述内容について、生活者としての理解に関する文章を、一文一意味に区切り、コードを抽出し、コードの意味内容の類似性に着目して、サブカテゴリを生成、その類似性からカテゴリ、サブカテゴリを生成した。分析内容は共同研究者間で合意が得られるまで繰り返し検討、信頼性、妥当性を確保した。データ分析にあたっては、患者個人が特定できないよう配慮した。

３）倫理的配慮

事前に学内の掲示等から本研究の情報を公開し、レポート作成者に対して本研究への参加を拒否できる機会を保障（オプトアウト）した。本研究は、公立大学法人山口県立大学生命倫理委員会の承認（承認番号2024－05号）を得て行った。

３．結果

１）学生がとらえた「生活者」（表２、図１）

学生がとらえた「生活者」は98のコード、33サブカテゴリから12カテゴリが抽出された。抽出されたカテゴリは【自宅での日常生活を送る人】、【楽しみを追究する】、【前向きな思いがある】、【その人らしさがある】、【病気や老いに向き合う】、【家族との関係】、【地域の人との関係がある】、【役割を持つ人】、【否定的な感情がある】、【自立して生活したい】、【困難感を感じる】、【今後のことを考える】であった。サブカテゴリは表２の通りである。

表 2. 学生がとらえた「生活者」

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
自宅での日常生活を送る人	日常生活を送る	日常生活を送る人 自動車の運転をする人 生活習慣を持っている人 自宅での生活がある人
	日常生活において大事にしていることがある	食べることを大事にしている人 ペットを大事にしている人 自宅の住環境を気にする人
楽しみを追究する	生活の中に楽しみがある	趣味・好きなこと・楽しかったことがある人 楽しんでいる人 生きがいがある
	生活の中の楽しみを継続発展させる	楽しみの継続する人 楽しみをみつける人
	楽しみが原動力	趣味が原動力
前向きな思いがある	前向きな思いをもって生活してきた	前向き・ポジティブな思いを持っている人 好奇心がある人 挑戦する人
	前向きに過ごしている	希望を持っている人 生きたい
その人らしさがある	価値観や信念がある	価値・信念・誇りがある 人生から形成された価値観がある
	性格がある	元気で明るい性格 人の意見に流されやすい性格 几帳面な性格 優しい
	その人らしい行動をしている	活動的である 一つの事に取り組む 継続力がある 責任感がある 忍耐力がある 謙虚さがある 人との関わりを大切にしている
	その人らしい思いがある	思いやりがある 楽しませようとする人
病気や老いに向き合う	自分の身体や病気への関心がある	自分の身体のことを知りたいと思っている人 自分の身体が気になる人
	病気や老いによる変化を受け止める	変化を感じる 老いに適応している 病気を受け入れている人 現在の状態との折り合い
	積極的に治療を受け自己管理をしている	良くなりたいと思っている人 自分・治療に向き合う人 自己管理をしている
家族との関係	家族への思い、家族からの思いがある	家族への思いがある 家族からの思いを感じている
	家族の存在に価値を見出している	家族との時間を大切にする 家族からの支援は心強い 家族が生きる力になっている
地域の人との関係がある	地域の人との関係を大切にしている	人との関わりを大切にしている 人のために何かをしたいと思っている 感謝の気持ちを持っている 地域の人とのつながりを大切にしている 人と関わるのが好き
	地域の人と関係を築いている	友人がいる 近所の人や地域の人と関わっている 職場で様々な人と関わっている 職場の同僚と余暇活動をしている 信頼関係を築いている人がいる 周囲の人から慕われている
	地域の人から支えられている	心配してくれる人の存在がある 周囲の人から支えられている
	地域の人との関係が原動力になっている	感謝の気持ちが原動力 友達が原動力
役割を持つ人	家庭における役割がある	家族の中で役割がある 家族の介護や疾病管理の役割を担う 子育てを担っていた
	社会的な役割がある	社会的な役割が変化してきた 社会的な役割を果たしている 仕事で忙しくしていた
否定的な感情がある	不安がある	不安がある 不安と希望のゆらぎ
	病気を受け入れられない	病気をうけいれられない 病気がわかるとショック
	現在の状況に対する否定的な感情	悲観的な感情がある ストレスを感じている 過去に悲しい体験があった
自立して生活したい	自分の力で生活したい	自立心がある 自分の力で、出来るようになりたいと思っている 自分の力できることが生きる力になっている
	人に迷惑をかけたくない	迷惑をかけたくないと思っている 頼りたくないと思っている
困難感を感じる	苦労した経験がある	自営業で苦労した 若くして両親をなくして苦労した 戦時中食べ物がなくて困った
	不自由さを感じている	食べることができていない 身体の不自由さがある 日常生活の不自由さがある
	困難さを感じている	自力での活動が困難 自由に動けない 生活上の困難がある 生活習慣を変えなければいけない困難
今後のことを考える	今後の暮らし方	退院したい、自宅で過ごしたい 病院で過ごしたい これまでと同じように暮らしたい
	今後への思い	今後に希望をいだいている 今後も前向きに生きたい 今後に不安を持っている
	自分らしくありたい	身体の衰えを受容しつつも自分らしくありたい 好きなことを最後までしたい

カテゴリおよびサブカテゴリの関係と特徴を図１にまとめた。

学生が捉えた生活者は、まず、「地域社会で人々との関係を築きながら役割を持ち、家族とともに自宅で日常生活を送る人」であった（【地域の人との関係がある】【家族との関係】【役割を持つ人】【自宅での日常生活を送る人】）。

次に、「過去から現在にかけて、病気や老いに向き合いながら困難感や否定的な感情を持ちつつも未来に向けて、自立した生活を望み前向きな思いや楽しみを追究しながら今後のことを考えている」という存在であった（【病気や老いに向き合う】【困難感を感じる】【否定的な感情がある】【自立して生活したい】【前向きな思いがある】【楽しみを追究する】【今後のことを考える】）。

さらに、そのすべての要素において【その人らしさがある】ことに気づいていた。

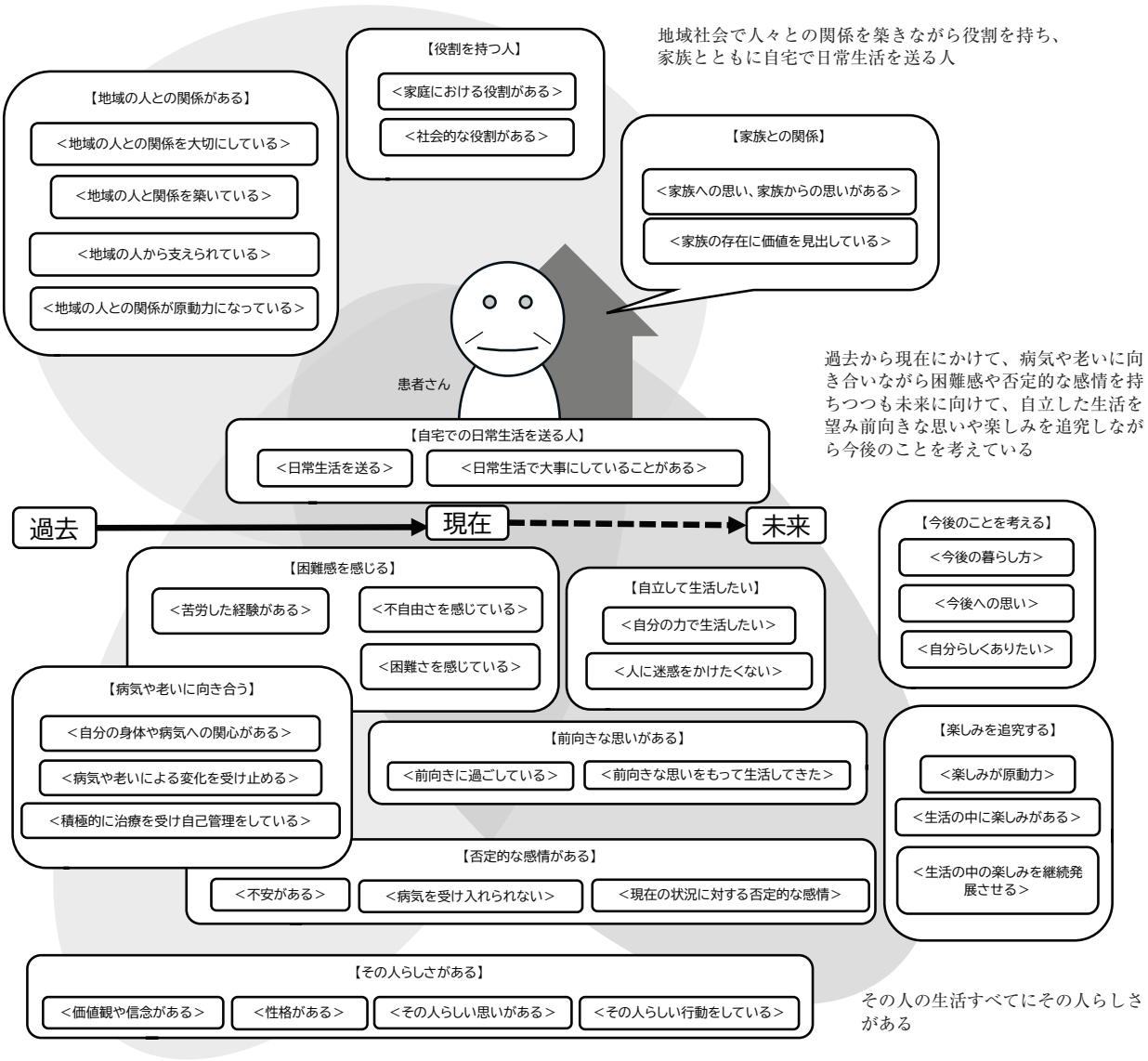

図1　学生がとらえた「生活者」

４．考察

1)学生は対象を生活者として理解していた

本研究の目的は生活者理解のために導入したライフヒストリーインタビューを初学者に用いることの効果、すなわち基礎看護学実習Ⅰの目的の一つである「対象を生活者として理解」するという目標が達成できているかどうかを明らかにすることである。１年生が基礎看護学実習Ⅰで作成したレポートの内容を二次利用し、レポートの記述

内容を分析した。

その結果、学生は対象を生活者として理解することができており（表２、図１）、基礎看護学実習Ⅰでライフヒストリーインタビューを用いることは、その学習目的を達成するために効果的な取り組みであることが明らかになった。

そのように判断した根拠は２つある。まず一つ目は、いくつかの先行研究で、今回と同様の結果であったことによる。

今回明らかになった【自宅での日常生活を送る人】、【その人らしさがある】、【病気や老いに向き合う】、【家族との関係】は、菊池らが臨地実習における看護学生の「生活者」の理解に関する21件の文献を検討したレビュー[6]と同様の結果であった。前述した【その人らしさがある】は、吉原ら[7]が、老年看護学実習においてライフストーリーを聞くことによる学生の学びの結果と同様であった。さらに、【楽しみを追究する】、【地域の人との関係がある】、【役割を持つ人】、および前述した【家族との関係】は竹口ら[8]が「在宅看護論実習」を履修した67名の学生が実習終了後に提出したレポートを質的帰納的に分析した結果と同様であった。また【家族との関係】、【否定的な感情がある】、【困難感を感じる】は菊池ら[9]の報告、【自立して生活したい】は佐藤ら[10]の報告、【前向きな思いがある】は小木曽ら[11]、【今後のことを考える】は山田ら[12]と同様の結果であった。

二つ目は、本研究で学生が捉えた「生活者」は、吾郷ら[2]が述べる「現在を生きる対象の生活状況を捉える水平的な視点」と「過去や経験をもち,生き方を主体的に選択しながら健康を実現していこうとする存在と捉える見方」の両者が含まれていた。

カテゴリおよびサブカテゴリの関係と特徴（図１）から、「水平的な視点」として、学生は対象を生活者として「地域社会で人々との関係を築きながら役割を持ち、家族とともに自宅で日常生活を送る人」と捉えていた。また、「過去や経験をもつ人」という視点では「過去から現在にかけて、病気や老いに向き合いながら困難感や否定的な感情を持ちつつも未来に向けて、自立した生活を望み前向きな思いや楽しみを追究しながら今後のことを考えている存在」を捉えることができていた。

さらに、学生はその対象者に「その人らしさ」があることにも気づいており、生活者としての個別性を認識していた。これらの学生の捉え方は、吾郷ら[2]が示した「生活者」の特徴を網羅しており、対象を生活者として十分に理解していたといえる。以上のことから、学生は対象を生活者として理解することができており基礎看護学実習Ⅰにおいて生活者理解のための取り組んだライフヒストリーインタビューは学習目的を達成するために効果的な取り組みであったと考える。

2)初学者が病院で対象理解を深める方法の一つとして意義ある取り組みである

先行研究でのライフヒストリーインタビューの効果は主に老年看護学、在宅看護学、地域看護学関連の講義や実習での報告で、看護学を学び初めて間もない学生ではなく、ある程度学びを深めている学生における効果であった。今回、１年生を対象とした基礎看護学実習Ⅰにおいて同様の効果があったことから、初学者が対象理解を深める方法の一つとしても意義ある取り組みであることが明らかになった。

これまで病院における基礎看護学実習において、「対象理解」あるいは「生活者として対象を理解すること」は学生の課題であった。山本ら[13]は、基礎看護学実習Ⅰの病院実習で学んだ内容を分析した結果、病院実習の目的である“看護師の役割の理解”についての記述が多いが、“患者の生活の理解”についての記述が少なかったため、学生に対して患者の療養生活への意識付けする必要性が示唆された、と述べている。また、吾郷ら[2]は、基礎看護実習Ⅰ(家庭訪問実習)と基礎看護実習Ⅱ (病院実習)の後に、「生活者を理解する視点」の変化を明らかにしたところ、家庭訪問実習では、「生活者を理解する視点」の主なカテゴリーとして「生活習慣」「価値観・生き方・生活の楽しさ」があり、病院実習では「日常生活動作」「健康・病気・症状」があったことから、病院実習では生活者理解に限界があり、看護学生が地域の中で生活者を捉える機会を早期に設定することは対象理解の幅を広げる意義がある、と述べている。

本研究は、病院における基礎看護学実習ではあるが、学生達は、患者を生活者として捉えることができていた。このことから、ライフヒストリーインタビューは、病院における基礎看護学実習の「対象理解」あるいは「生活者

として対象を理解すること」の課題を解決する取り組みであるともいえる。ライフヒストリーインタビューを用いることで、初学者が単にコミュニケーションをとっただけではできない、深い対象理解ができる可能性があり、病院内でも対象を生活者としてとらえることができる経験となる。

５．結論

ライフヒストリーインタビューを初学者に用いることの効果、すなわち基礎看護学実習Ｉの目的の一つである「対象を生活者として理解」するという目標が達成できているかどうかを明らかにするために、基礎看護学実習Ｉ受講生57名のレポート内容を分析したところ、以下の結論が得られた。

１．学生がとらえた「生活者」は【自宅での日常生活を送る人】、【楽しみを追究する】、【前向きな思いがある】、【その人らしさがある】、【病気や老いに向き合う】、【家族との関係】、【地域の人との関係がある】、【役割を持つ人】、【否定的な感情がある】、【自立して生活したい】、【困難感を感じる】、【今後のことを考える】であった。これらの内容は先行研究と一致しており、学生は対象を生活者として理解することができていた。

２．学生が捉えた「生活者」は「現在を生きる対象の生活状況を捉える水平的な視点」と「過去や経験をもち,生き方を主体的に選択しながら健康を実現していこうとする存在」の視点を含んでいた。これらは「生活者を理解するために必要な視点」として先行研究で示されており、本研究の結果とも一致していた。

以上の結果から、基礎看護学実習Ｉでライフヒストリーインタビューを用いることは、学生が対象を生活者として理解するという学習目的を達成するために効果的な取り組みであることが明らかになった。

利益相反

本研究における利益相反に該当する事項はない。

文献

1) 厚生労働省・看護基礎教育検討会報告書、令和元年10月15日、（2024.12.29検索）https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf　https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_07297.html
2) 吾郷ゆかり, 吉川洋子, 松本亥智江, 田原和美, 祝原あゆみ, 梶谷みゆき, 松岡文子, 平井由佳（2009）. 看護基礎教育における「生活者を理解する視点」家庭訪問実習と病院実習後の自己評価より. 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要 3 77-83.
3) 尾﨑章子, 齋藤美華, 東海林志保（2016）. 老年看護学教育にライフヒストリー・インタビューをとりいれた学習成果. 東北大学医学部保健学科紀要 25 (1), 39-45.
4) 小泉美佐子, 伊藤まゆみ, 宮本美佐（2000）. 老年看護学の対象理解にライフヒストリー・インタビュをとり入れた学習効果. 老年看護学 5 (1), 140-146.
5) 加藤和子, 窪内敏子, 福田裕一, 金岡哲二, 小林尚司（2018）. 高齢者を理解するために生活史を用いた教育に関する検討. 日本赤十字豊田看護大学紀要 13 (1), 131-137.
6) 菊池真弓, 若澤弥生（2022）. 臨地実習における看護学生の「生活者」の理解に関する文献検討. 了徳寺大学研究紀要 (16) 285-296, 131-137.
7) 吉原悦子, 丸山泰子, 金子由里, 溝部昌子（2021）. 老年看護学実習においてライフストーリーを聞くことによる学生の学び. 西南女学院大学紀要 25 13-21.
8) 竹口和江, 中尾八重子, 山谷麻由美, 濱田由香里（2021）. 在宅看護論実習の充実にむけた学生の学びの検討−学生が捉える「生活者としての療養者」の特徴−. 長崎県立大学看護栄養学部紀要 19 11-20.
9) 菊池真弓, 若澤弥生（2021）. 病院実習において看護学生が「生活者」として患者を捉えた内容. 看護教育研究学会編集委員会 編 13 (2), 15-25
10) 佐藤美樹, 田髙悦子（2013）. 在宅看護における生活者としての対象理解にかかわる学生の学びの視点. 日本看護学教

育学会誌 22 (3), 47-56.
11) 小木曽加奈子, 安藤邑惠 (2010) . 看護学生における高齢者理解－ライフヒストリーのインタビューを基にした内容分析－. 教育医学 55 (3), 283-292.
12) 山田千春, 末安明美, 西山章弘 (2021) . 高齢者の価値観形成過程に着目した対象理解. 日本ヒューマンケア科学会誌 14 (2), 73-82.
13) 山本智恵子, 土井英子, 杉本幸枝, 木元歩美 (2012) . 基礎看護学実習Ⅰの病院実習での学びと課題. 新見公立大学紀要 33 119-124.